琉球大学学術リポジトリ

班共同制作活動における班編成の問題：大学授業「視聴覚教育」におけるスライドづくりをとおして

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1080

班共同制作活動における班編成の問題

——大学授業「視聴覚教育」におけるスライドづくりをとおして——

藤　原　幸　男

A Study of Group Making in Co-operative Group Activity
—— through Slide Work Making in Audio-Visual Education ——

Yukio FUJIWARA

(Received April 28,1995)

はじめに

1994年度後期「視聴覚教育」は同年度より学芸員資格取得のための必修科目になり、同資格取得希望学生が多数登録したために、受講生は予想外に多く、51名となってしまった。所属学科も、学芸員資格取得をめざす史学科（11名）、社会学科（13名）、生物学科（14名）の三学科に集中し、三学科で受講生の4分の3を占めてしまった。そこで二カ月にわたって班共同制作活動を行うスライドづくりにおいて、班編成を混合班にするか同一学科班にするかで迷ったのだが、まず同一学科で班を編成して、そのあと残りの者で混合班を編成することにした。こうして、1班（史学）、2班（社会学）、3班（保健・社会学・中教・養護の混合）、4班（生物）、5班（生物・海洋・生産の混合）〔各班10～11名〕を授業担当者の方で編成して、スライドの班共同制作活動に取り組んでいった。

最終的に同一学科班を基準にして班構成をしたが、そこには、同一学科の方が日常的な接触があり、学科での課外活動の成果が期待されると考えたからである。いうまでもなく、スライドの班共同制作活動にはさまざまな力量が必要になる。まず作品の構成力、構想力、さらには撮影機器操作技術、撮影技術が必要だし、活動の組織的展開にともなって、活動時間の調整、計画性、分業への習熟が必要となる。班共同制作活動はこれらの力量を必要とする総合的活動であり、総合力が必要となる。[1]大学では学生の自主的活動として、新入生歓迎行事や大学祭・追い出しコンパなどの課外活動が学科を単位として展開されており、その活動が自主的・自治的に推進されれば、副産物として対人関係能力・社会的能力が発達・形成され、共同活動に習熟する。とくにスライドづくりでは授業時間内では活動が終了せず、授業時間外での活動がかなり多く必要となり、その面で課外活動の成果が生かされると考えたのである。

しかし、活動が自主的であっても、自治的・民主的に推進されず、だれか特定の個人に活動が委ねられ、力の弱い学生や要領の悪い学生に仕事が押しつけられてしまう場合もある。そのために、共同的活動に習熟せず、共同的活動に悪いイメージをもっている場合もある。また、同一メンバーのため新鮮さがなく、班員同士で甘えあってしまい、活動が進まないこともある。逆に、混合学科の場合、学科を単位とした課外活動の成果は期待できず、新しく関係をつくりだしながら共同活動を進めなければならない。班員間に緊張も多く、大変さも生じる。しかしそれだけに、うまくいけば異質との出会いが生まれ、創造的な活動が展開して、かえって強烈な経験になることもある。

こうしてみると一概に同一学科班がよいともいえない。今回同一学科班・混合学科班の両者が編成できたので、両者を比較し、そのなかでスライドづくりの展開過程のちがいをみることにしたい。

しかし、班共同制作活動の成否には、学科以外の要因も関連しているかもしれない。たとえば男女、学年などのちがい、班長のリーダーとしての自覚とリーダー的活動の有無、班員のフォロワーとしての自覚とフォロワー的活動の有無、スライドづくりの展開過程のちがいなどである。こうした学科以外の要因が、同一学科班・混合学科班の

班共同制作活動を分析・検討していくなかで浮かび上がってくる。そこで、最後に、これらの要因について概括的にみていきたい。検討手法としては、前稿[2]と同じように、スライド制作の終了後に学生が提出したレポート「スライド制作に取り組んで」の分析による。

1　同一学科班の班共同制作活動

同一学科班としては、1班（史学科）、2班（社会学科）、4班（生物学科）の班がある。ここでは、このうち1班（史学科）、2班（社会学科）の班共同制作活動を取り上げ、紹介しつつ検討していきたい。

(1)　1班「ぐすく（城）」

1班は法文学部の史学科の学生ばかりで、考古学コースの学生がほとんどであった。班員は11名で、その内訳は4年次6名、3年次5名で、男11名女0名であった。

①　テーマの模索・決定

授業担当者は12月1日にスライド制作過程についてビデオを映写、そのあと制作過程を説明し、班編成した。同月8日には、これまで制作されたスライド作品を映写し、それを手がかりにしてテーマを模索し、同月15日にテーマを決定する、という段取りで進めた。班編成に関して、1班のレポートでは、同一学科のメンバーだったので緊張感がなく、班での話し合いで困ることはなかった、と述べている。12月1日の班編成において1班は、県外に考古学調査に1か月でかけて前半参加できない4年次学生を班長にしようとしたので、授業担当者は「本当にこれでよいのか」と話し、検討し直させた。それで、班長はこの日には決まらなかった。このときには、スライドづくりは難儀だ、面倒、煩わしいという思いと、「どうせまだまだ先のことだからゆっくりやってよい」という思いが班中に強かったようである。8日のスライド作品の映写のときに、出席したのは1名だけで、殆ど欠席だった。15日に班長が決まり、テーマについても話し合い、製糖工場、ビール工場がだされたが、テーマは決まらなかった。そこで翌16日に再度集まり、「沖縄の城（ぐすく）」をテーマにすることに決まった。その背景には、史学科にふさわしいテーマをしたいという意欲と、ちょうど勝連グスクが現在発掘中であり、その調査が考古学研究室にもちこまれたという事情があったようである。こうして、勝連ぐすく、中城ぐすくを中心にして、沖縄の城（ぐすく）を取り上げることになった。

集合状態からわかるように、スライドづくりについて真剣に考えている班員が少なく、馴れ合い的で、互いに頼った状態だったようである。このことがスライドづくりの取り組みを遅らせることとなった。

②　コンテの作成

1班では、行ってみなければスライド構想はわからない、ということで大まかな流れの構想にとどめ、細部にわたるコンテの作成は取り立てて行わなかった。主要な城（ぐすく）の撮影が終わってからコンテを作成した。1月14日に班長の家に集合して、仮りのコンテを作成し、足りない場面の撮影を補充した。「それ以前の大まかなコンテは大幅に変更された」と書いている班員もいる。

③　取材と撮影・インタビュー

1班では、勝連町教育委員会に勤務している先輩に連絡をとって、12月17日にとりあえず下見を兼ねて3名で整備工事中の勝連ぐすくに行き、撮影にはいっている。どこをどんなふうにとるかはあまり考えず、散策路順にカメラ2台を使ってどんどん写真をとっていった。先輩にインタビューする予定であったが、時間がとれず、できなかった。27日（火）には4名で中城ぐすくにでかけ、見学順に撮影していった。撮影した班員によれば、「あっちを撮ったりこっちをとったりしないように気を付けた。それでも編集の段階で、分からなくなってしまったところがあった」という。1月14日に班長の家に集まり、スライドの構成について話し合い、タイトル・資料・終わりの画面を撮影した。15日に首里ぐすくに行き、完成したぐすくとして撮影した。

主要な撮影は12月17日から27日にかけて行われたのだが、ある班員は「みんなやる気がみられない。というのも、4年次は卒論に忙しく、また冬休みにはみんな予定があるみたいなのでスライドづくりにだけ打ち込むわけにはいかないのだ。」と述べている。しかし、多忙な状況のなかで日程

を調整し、スライドづくりの過程にそって必要な仕事をすすめ、実行していく計画性・共同性がスライドづくりの成功には不可欠なのである。ぐすくをこの切り口から取り上げる、ぐすくについて知識を掘り下げることが不足し、構想が不十分なまま、いきあたりばったりで撮影にとりかかったことに問題がある。知識の掘り下げと構想の練り上げが不足したために、とりあえず撮影することが優先され、同じ学科なのに互いに遠慮してか、班員間の日程調整に真剣に取り組まずに、特定の人に任せることになったのである。必要な作業を確定し日程を突き詰める作業が行われず、あまり撮影計画もたてずただ集まれる人だけで適当に分担していったことがスライドづくりを質の低いものにすることになった。インタビュー・録音については、計画さえされなかったようである。

④　編集・ナレーション録音

1月14日の撮影台本の頃からスライドづくりに班員の目が向いてきた。ある班員は、「11人という人数がかなり多いことに気づきはじめた。どう考えても多すぎる。みんなやる気は出ているが、この人数の議論をまとめるのは大変だ。まして、仕事の量は3人ぐらいで充分こなせる。人数と仕事量のギャップがみんなの気持ちを空回りさせる。」と述べている。仕事内容について充分見通せずにいるようだ。そのせいか、分業を思いつかずにいるようである。1月19日（木）、26日（木）と班長の家で編集作業をおこない、2月1日には全員で集まって録音し完成させた。班員の一人は、「録音を終えテープを取り出したときにはみんなで歓声をあげ喜んだ」と述べている。

⑤　スライドづくりに取り組んで

スライドづくりに取り組んでの感想を、1班の班員は次のように述べている。

「私たち1班は他の班に比べてスライド作成への取り組みも遅く、意欲も薄かったと思う。班の構成員が同じ学科の者であったがために馴れ合いになり、みんな誰かがやるだろうとあまり何もしたがらず、のんびり構えていた。」

「制作にあたって色々なことがあった。はじめはとりかかりが悪く、後半になっての追い込みで仕上げたため焦りもし、計画が実行についてくるようなところもあり、だいぶ無駄があった。もっと計画をきちんと立てて動けば無駄も少なくてすみ、注意も払われたものを作れたであろう。しかし、今回のスライドづくりで得られたものも多い。」

「正直言って始めのうちはあまり乗り気ではなかったのであるが、作業を進めるうちにだんだん良いものをつくろうという欲が沸いてきて、最終的には一生懸命であった。卒業を前にして、良い思い出が形に残せてよかったと思う。」

「自分たちの班はみんな同じ学科の人間で構成されており、その意味では、楽な面もあったが、全然知らない人々と一緒にスライドづくりをするのもよいのではないか。何か、連帯感というか、一緒につくりあげてきたんだという気持ちをもつことができると思う。」

1班は3・4年生で構成され、とくに4年生は卒論のためのフィールド調査・論文執筆に追われ、十分参加できなかったことも意欲の薄かった大きな原因であろう。それにしても、上記の感想にあるように、そうした多忙さを覚悟できず、学生たちは前半における段取りの拙さ、協力体制の悪さを指摘しているが、後半の追い込みにおいて共同・協力し、うまくいったようである。そのことが結果としてスライドづくりを印象深いものにしているように思われる。班長の選出は他の班より遅れたが、班長は撮影に自ら参加し、また1月14日以降において、自分の家でコンテ作成、編集をおこない、自分が招集して活動を展開していくという形となった。ただ、活動内容についての見通しとリードが充分でなく、班員を動かしきれなかったようである。班員にもフォロワーシップが足りなかったようである。

同一学科班の共同制作活動について、他の班の事例をみてみたい。

(2)　2班「琉球ガラス」

2班は社会学専攻（人類学コース）の学生ばかりで、2年4名、3年4名、4年2名の2・3・4年混合の班で、男5名女5名である。

①　テーマの模索・決定

12月1日に授業担当者から班編成されたが、同一学科班で編成されたことについて、班員の多くは「気が楽になった」「これなら気兼ねなく話もできるし、やりにくいと感じることもないだろう。

スライド制作は楽しくできそうだと思った。」と述べているが、なかには、「打ち解けることから始めなければならない不安は皆無だったが、持ち前のいい加減さと馴れ合いから順調にことが運ぶとは思われなかった」と述べている班員もいた。

2班は、責任感が強く、スライドづくりをリードする者を班長として選出した。1班と比べて、この班長の選出のあり方が異なり、班長のリーダーシップの有無が活動に影響を与えることになった。

テーマについては、1班は12月8日にいち早く決まった。それは、班員の一人（班長）が読谷のガラス工房でアルバイトをしているので、琉球ガラスにしようということだった。ある班員によれば、「他の班がずいぶん悩み苦しんでいたのに対し、私たちの班はほんの10分たらずでテーマおよび取材日程まで決まってしまった」。すばやい決定である。だがこの班員は、「しかしこれが後々の制作過程に悪影響を落とすことになったのである」と述べている。ここに落とし穴があったようである。

② コンテの作成

12月22日はコンテ作成の日だったが、テーマ・取材先が決まり、「取材する側に身内がいるという安心感からか、だれも特別に琉球ガラスのことを調べている様子はなかった」。「もうあとは何とかなるさ」という心境で安心しきってしまい、「グループ内には全く緊張感がなかったということも拍車をかけ」て、コンテ作成には至らなかった。琉球ガラスの歴史、琉球ガラスの制作工程、琉球ガラスの未来と展望、といっただいたいの流れをつかむにとどまった。ともあれ工房への取材が先であることで一致したが、取材は班員の都合がつかず12月28・29日に行った。結局、コンテが完成したのは1月29日だった。

授業担当者としては、例年は12月25日頃コンテの作成・提出を要求したが、今回のスライド制作においてはおおまかな流れができればよいと考えて、あえて提出を要求しなかった。この点で、グループでの緊張感の欠如もあいまって、授業担当者の当初の意図以上に取材優先・場当たり的な制作に流れた傾向が感じられる。

③ 取材と撮影・インタビュー

2班では、取材は12月28・29日の二日間にした。その理由は、ガラス工房ではその日によって作っているものが違っていて、できのよいものを採用するためと、班員の都合を考慮してのことである。とはいうものの、帰省・集中講義・バイトで4名が不参加であった。28日には6名のうち2名が急に来れなくなり、4名ででかけた。工房では花瓶と赤いグラスを作っていた。カメラマン予定者との連絡が悪く、カメラ操作に不慣れな者が撮影することとなった。男子二人が撮影したが、フラッシュが使えず（フラッシュ機能が付いていない）、フラッシュを焚かずに制作工程を撮影したために、できあがりが心配だった。「琉球ガラスについてほとんど下調べもせず、インタビューについても全くといっていいほど打合せをしていなかったので、十分な質問ができなかった」。29日には3名ででかけた。泡盛を入れる酒瓶をつくっていた。このときカメラのストロボが効かないことを知り、光量を加減したりして撮影に手間取り苦労した。普通写真用フィルムでも撮影した。工房の責任者（社長）に話をうかがったが、録音機材をもっていかなかったため、折角の貴重な話を録音できずに終わった。また、3時以降の忙しい時間に行ったため、制作工程担当者の一人ひとりにインタビューができなかった。29日に行った班員は、「このとき気がかりだったのは、カメラのフラッシュが使えなかったことである。また、コンテを考えずにただ取材にきたので、きっとまたくるはめになるだろうということだった。」と述べている。

授業担当者からみると、取材については参加できないものが多く、日程調整が充分詰められたのか疑問である。当日の班員間の連絡、場所の確認が不充分で、現地に着くのに手間取り、3時過ぎに着いている。このために、ゆとりをもった撮影とインタビューができなくなった。また、撮影機材の確認・準備が不足であった。このことは、写真のできが作品の優劣を大きく左右するスライドづくりにとって決定的である。さらに、あまり下調べをしないで、制作工程の撮影、インタビューをした点が悔やまれる。この準備不足がせっかくの取材・撮影・インタビューを生かせなくなったのである。

④ 編集・ナレーション録音

1月17日に提出したフィルムが19日にスライド

に現像されて返却されてきた。12月28日に撮影した写真は予想通り失敗が多かった。29日の写真はきれいに撮れていた。足りないコマを撮影しに、1月21日に工房にでかけた。19日のときに、ある班員は、「思ったよりも不足していたコマが多かった。やはり、取材前の打ち合せがきちんとしていなかったのが原因だろう。」と原因を振り返りつつも、「どの班もきれいに撮れているようで、少しあせる気持ちがでてきた。しかしそれと同時に、自分たちも負けないような作品を作ろうというやる気も生まれたと思う。」と述べている。21日の撮影にはほぼ全員が参加した。ある班員は「あまりにも多くの人数だったので仕事のある人とない人がいて、全員が頑張ったとは言えないことだ」と述べていたが、それでも、班員のうち4名は12月28・29日の取材に参加できずこの日が始めての見学となったため、印象深かったようだ。その後編集は1月26・28・29・30日と連日のように行った。「最初のときの余裕はどこに行ったのか、休み返上でスライドを制作するほど多忙な日がこの先続くのであった」。「残された一週間を有意義に使うために、解説文を書くグループ、残りの資料や材料を準備するグループ、撮影するグループに分け、班のメンバー全員で完成するまでの工程に携わることにした（始めからこうするべきだったのだが…）」。以前撮影した普通フィルムのスライド現象に時間がかかり間に合わないことを30日に知り、また急遽スライド用フィルムを買って工房にでかけ、撮影し、ようやく間に合わせることができた。「油断大敵」である。

ナレーションは、予定していた実践センターが授業のため使えず、教養部の教室を借りて行った。必要な人数だけ残し、あとは写真屋に現像されたコマを撮りにいき、流れにそって並べた。2月1日にテープとスライドを合わせ、不備はないかを確認した。こうして、後は発表会を待つことになった。

授業担当者としてここで気づくのは、失敗かもしれないと思ったら、早めに授業担当者に現像をお願いすることが必要だったことである。28・29日の撮影終了後から20日も空白がある。それから、普通フィルムのスライド現像には時間がかかることを前もって確認しておくと良かった。土壇場であやういところだった。しかし、それらのアクシデントがあったおかげで、間に合わないかもしれないという危機感が生まれ、連日の編集作業となり、結果的に共同・協力がなされ、良い作品ができたことになる。

⑤　スライドづくりに取り組んで

スライドづくりに取り組んでの感想を、2班の班員は次のように述べている。

「テーマを決めるまでは素早かったが、それで安心してしまったのかその後は行き当たりばったりの感じで、少し雑な仕上がりになってしまった気がする。もっと、この取材を通して何を伝えたいのかということを最初の内に決めておくべきだったと思う。制作工程だけに重点を置きすぎて、琉球ガラスの歴史や今後の展望といった、琉球ガラスの魅力を充分に伝えることができなかったと思う。」

「このスライドづくりは、本当に大変でした。一人の力ではできないものなので協力して行う重要性を改めて教えられた。しかし、私にとって得るものが大きかったことも事実である。人間やればほとんどのことはできるのだ、と思った。」

「案外いけるかもと思ったのは最初だけで、最後の方ではとてつもなく忙しく、本当に完成できるのかと感じていた。人間やる気になればできるもんだと我ながら感心した。」

「やっぱりこのメンバーで失敗をせずに順調にことを運ぶことはできなかった。しかし1月末の本当に完成するのかというような状態からよく完成までこぎつけたと思う。みんなにも自分にも拍手をあげたい。切羽つまらないとやらない人ばかりだから追い込みが効いたのかもしれない。」

「制作中での反省点は、みんなが顔見知りだったこともあると思うが、お互いに少し馴れ合いの気持ちがあったことである。集合時間を守らなかったり、打合せをきちんとしていなかったことによって、仕事が特定の人にかたよってしまったと思う。それぞれがきちんと自分の仕事を行うことの大事さが改めて身に沁みた。反省点はいろいろあるが、自分たちのスライドは満足のいくできだったと思う。」

「初めてにしては上出来であり、これも班長の仲村渠君のリードとそれについていった他のメン

バーの努力がこのような良い結果として現れたと思う。こういったグループで行う学習は正直いって小・中学校どまりで、長くブランクがあったように思える。このような学習形態は、今回のみならず小・中・高・大ともっともっと取り入れられるべきであると思う。」

上記の感想にあるように、取材即撮影、しかも撮影失敗で、何度も工房に撮影に行くことになり、とくに最後の一週間はスライドづくりにかかりっきりだった。残り一週間しかないという危機意識を班員みんなで共有できたために、共同・協力体制が確立されたといえる。しかしいい加減に仕上げるというのではなく、作業を分担しながら、納得いく作品をつくろうという誠実さで対処したことが、すぐれた作品として結実したのであろう。そこには、班長のリーダーシップとそれに従う班員のフォローアーシップがうまくいっていたことも成功の要因だと思われる。

同一学科班による班共同制作活動について、ある班員は次のように指摘している。

「私たちの班は残り一週間というところで非常にあせって、（発表会の）前日に仕上げるという、計画性に欠ける制作過程に終わってしまった。その（原因の）一つに、仲間同士の班編成も要因としてあげられる。確かに気がねしない間柄なのはいいのだが、集まろうと思えばいつでも集合をかけられるというのは却って緊張感を失い良くなかったように思う。今後班編成を行う際に、思い切って別々の学科同士を集めてみてはどうだろうか。」

同一学科であっても互いに時間を守って活動する、自分の都合は主張しつつ他者とぎりぎり詰めて調整するなどの共同・協力活動は可能だろう。しかし現実には、長い間共同生活をするなかで、互いの人間関係を崩さない配慮からか、まあ厳格にしなくてもいいだろうといういい加減さ・馴れ合いが生まれてくることが多い。この点で、「今後班編成を行う際に、思い切って別々の学科同士を集めてみてはどうだろうか。」という主張は検討に値するかもしれない。このスライドづくりにおいて、偶然だが、混合学科班も編成され、混合学科班による班共同制作活動が行われたので、以下でそれを見てみたい。

2　混合学科班の班共同制作活動

混合学科班として、3班（保健・社会・中教・養護の混合で、10名）、5班（生物、海洋、生物生産の混合で、10名）がある。

(1)　5班「オリオンビール」

5班は生物、海洋、生物生産の混合で、自然科学系の班である。班員10名の内訳は、3年8名、2年2名で、3年中心の班で、男5名女5名である。

①　テーマ決定、変更、再決定とそのあとの取り組み

12月1日に班編成したが、班長はくじで生物学科の学生に決まった。この日は、それぞれの自己紹介、連絡先の確認をするだけで終わった。8日にテーマを出し合った。このときに、蜂蜜産業、オリオンビール、ハブ、紅型、山城饅頭、ちんすこう、紅芋など、さまざまなテーマがだされた。15日に、話し合いを継続し、その適切さ・制作可能性に照らして消去していき、最終的にテーマをちんすこうに決めた。ある班員は8日の話し合いについて、「それまであまり班内の人達と話さなかった、むしろ話しづらかったけど、テーマの模索の時から雰囲気に溶け込めるようになってきた」と述べている。最初のときが話しづらかったが、わいわい出し合ううちにしだいに雰囲気に溶け込めるようになってきた、というのである。こんなものなのだろう。よく食べているけど、そのものについて知らないという理由で、ちんすこう（クッキー風の琉球菓子）に決まった。そして、18日に宜野湾市立図書館にみんなで行って資料をさがし、取材先をメモした。有名なA本舗には、断られたが、M菓子店には承諾を得た。こうして安心して、22日にコンテの作成日を迎え、スライドの流れについて出し合い、「だんだんそれぞれが意見を出し合えるようになってきて、まとまってきたな、と感じた」。1月8日に首里城を撮影し、14日に工場取材・撮影に行く予定であったが、1月6日に工場の方から「忙しいので」と断られた。重大事態である。そこで8日の撮影予定日に約束の時間に集合したときに事情を話し、急遽話し合いをし、見学が容易なオリオンビールにテーマを変更した。

ここまでの流れをみてみると、混合学科としての不利さはさほど見られない。異質な者との共同という点でやりにくかったのは最初の1回目だけであり、それぞれの考え・アイディアを意識的に積極的に出していくなかでくつろいだ雰囲気ができ、その雰囲気にみんな溶け込んでいったようである。むしろ、こうした過程で醸成された共同感情が基盤にあって、新鮮な関係ができ、関係が馴れ合いにならず、決めたことは守りあう規律めいたものができていったようである。それが、その後のコンテ作成、資料収集などでの協力となって現れていったとみることができる。授業担当者としては、テーマの変更については、断られて簡単に諦めすぎたように感じられる。せっかくスライドの構想も煮詰まり、雰囲気もまとまってきたのだから、電話帳などで他の「ちんすこう」製造業者に八方手を尽くしてあたってみると良かったように思う。趣旨を話して、もう少し粘ってみるとか、ちがう業者に交渉することが必要だったように思う。実際、過去において、突然断られて、急遽電話で他の業者にあたりまくってやっと取材・撮影ができた事例もある。

その後取材のしやすさから、オリオンビールにテーマを決めたのだが、オリオンビールでは、見学者用に案内コースを作っていて、取材しやすい反面、コースをはずれて一歩突っ込むとなると制作上の困難さがでてくる。製造工程は完全にコンピューター管理となっていて、ビール醗酵の内部の様子は見られないし、限られた工程しか見学できない、ガラス張りでしか撮影できないという難しさがでてくるのである。熟成されたビールを一つひとつ缶や瓶につめ次々に送りだされる場面は圧巻だが、それは他のコカコーラ・ジュースなどの飲料品工場でもできるのであって、スライドのねらいを製造工程におくかぎりでは見学以上の内容を盛り込むことは非常に困難である。5班は2回取材・撮影に行ってスライド作品を作っているが、こうしたことの検討が不充分で、混合班としての雰囲気の高まりはできてきたにもかかわらず、うまく生かせなかったように思われる。もちろん、テーマ変更後は大変な仕事量が迫ってきて、とくに発表会までの一週間は連日のように集まってスライド編集・録音に取り組んだことは、すでにみた2班「琉球ガラス」と同様である。

② スライドづくりに取り組んで

混合班の共同活動については、「短い間ではあったが、知らない人との共同作業はいい緊張感があってよかった。今回のこの経験は、特にグループで何かを作る場合の話の進め方、まとめ方に生きてくると思う。」「他の学科の人と協力して、一つのことを進めることから、その難しさと、完成したときの充実感を知った。」「何よりも、友人ができたのはうれしいことだし、本当に楽しかった」という感想に代表されよう。

困難ななかで仕上げることができたのは、班長のリードによるところが大きいと班員は感じているようである。「とくに班長の的確な指示や計画性は、期限に間に合った大きな要因であった」と複数の班員が指摘している。また、班長自身は、「後半は本当にみんなが協力してつくった実感がある。……班長としてスライド制作に関わってきたが、休むことができないし、いつでも全体を把握しなければならないのできつかった。最初は本当に嫌だと思っていたが、だんだん形になってくるとそんな気持ちは吹っ飛んだ。もし班長でなかったら、引っ込み思案の自分だったら、きっとこんな風に作品を完成させた喜びを味わえなかっただろうなと思う。」と述べている。班長が指摘しているように、最後の詰めになって、「学科がちがうと日程も全然ちがうので、どうしても集まる人数が限られ、タッチしていない部分がでてくる」ので、分業と協業をいかにうまく行うかが課題であろう。

(2) 3班「壺屋焼」

3班は保健、社会、中教、養護の混合で、10名の班である。内訳は、4年2名、3年2名、2年6名で、男子4名女子6名である。

① テーマの模索・決定

12月1日の班編成あとの話し合いでは、ちがう学科の人が多いせいか互いに遠慮して全然進まず、班員の自己紹介をし、連絡先を確認したにとどまった。班長はじゃんけんによって2名選出した。「不安が残るスタートだった」、「正直言ってかなり不安であった」と班員は述べている。8日はとりあえずテーマをあげていったが、決めるには

いたらず次週にもちこした。15日では、最終候補として残ったオリオンビール、ちんすこう、壺屋焼、琉球舞踊のなかから無記名投票によって「壺屋焼」に決定した。本土の学生が壺屋焼を見たいといったのも決定要因となった。

② コンテの作成

次回は12月20日に集合することにし、それまでに「図書館」「那覇市伝統工芸館」「県立博物館」に行って資料を収集し、下調べをすることとなった。そのなかで、何人かの班員は歴史の重み、奥深さや伝統を感じたようである。20日にスライドの構成を考えたが、遅れていった班員は、案が煮詰まっているのを見て「みんなのやる気に驚いた」ようだ。全体の構成を①歴史、②特徴、③作り方、④現在の生活との関わりについて、とした。22日の授業時に、この4つの構成別にグループを分け、それぞれの班に分かれてコンテ作成のための打合せをした。ここで、グループに分かれてコンテ作成作業にはいったのは機能的で、すぐれている。各グループで1～2回集まったあと、日程を調整して28日夕方5時に全体で集合し、各グループでしあげたコンテを発表し手直しをした。各グループにまかせきりにしないで、全体で討議し修正することでまとまりが生まれてくるし、スライドの構成のイメージが明確になってくる。「私も含め、集中講義で忙しい人が多い中で、協力しあってコンテを完成したときは本当にうれしかった」と述べている。構成について詰めてから取材・撮影に入ったことが特徴である。インタビューについても、質問事項を確認した。この日に、製陶所に電話帳で調べて連絡を取り、1月7日に行くことにした。ある班員は、「今、振り返れば、現場訪問以前の細かな打合せが結果として功を奏した気がする。事前の準備がいかに大切かつ重要かを知らされた。」と述べている。

③ 取材・撮影・インタビュー

1月7日に壺屋にほぼ全員参加した。早めにいった班員は、組合の制作したビデオを見せてもらった。そのビデオは「私たちがいままで知っていたこと以上に詳しく、わかりやすくつくられていた。それを見ることでこれまでの確認ができ、良かった」。インタビューしながら、製造工程を撮影した。

④ 編集

19日に現像されて戻ってきた。各グループごとに写真を仕分けして、順番に並べ、取捨選択し足りないコマを確認した。19日に足りないコマを撮影し、26日に現像されて帰ってきた。こうして、スライド作品ができてきた。「だんだんと“自分たちの作品”が完成していくにつれて、メンバーの意気も高まっていった」。次はナレーションの録音である。それぞれナレーションの一文を音読して、ナレーターを決めた。コマ切替えの合図は舌の破裂音で行うことにした。

⑤ スライド制作を終えて

スライド制作を終えて、班員は次のように感想を書いている。

「スライド上映が終わり、みんなが心からの『お疲れさま』の言葉を言い合った。すかさず打ち上げの打合せが始まる。学科のちがう、初対面のメンバーが本当によく団結したと思う。こうして打ち上げの話があがることが、その証拠だと思う。」

「テーマが決まっていくにつれて、徐々に班の団結力というか仲間意識が芽生えてきた。みんなで一つのものを作り上げたことも大きなプラスになったように思えた。」

「本当に楽しかった。始めは、“本当に作れるのかな”という不安と、グループの人間関係など、不安ばかりであった。しかし、制作をしているうちに、グループとしてのまとまりもでき、いろいろな人と知り合うことができた。……この視聴覚教育を受講して本当に良かったと思います。」

「違う学科の入り交じったメンバーとの交流は、親しくなるまでが大変であったが、最後には本当に心からにっこり笑って『お疲れさまでした』と言えるくらいになっていた。」

3班は、混合班のためか、班員のあいだに溶け込むまでに時間がかかったのだが、しかし、時間をかけてテーマについての話し合いをし、テーマを決め、そのあと分担で調査をしたりコンテを作ったりしていくなかで、しだいに仲間意識がでてきて、まとまってきたようである。そこでは、学科の違いはハンディーにならず、むしろ異質なものとの共同の楽しさをつくりだしていったようである。さらに、3班では、分業と協業の統一が配慮

されていて、作業が頻繁になされていった。ただある班員によれば、「分担作業で進めたせいかどうしてもコマごとの関連性のうすさが目立っていた」という問題点も指摘されていた。この点はむずかしいのだが、分担作業をしながらたえず全体の構成に気を配って制作していかなければならない。そうしないと、つなぎが不自然になる。全体を把握する人が必要なのである。それにしても、異なる学科の者との共同作業をすすめたなかで、大多数の班員が混合班編成で良かったと述べていることに注目したい。

3　班編成の仕方が班活動に与える影響

(1)　班編成における学科・男女・年次の問題

同一学科の班編成において、男女比、年次も影響する。同一学科でも、1班「ぐすく（城）」では、史学科考古学コースの学科的性格（テーゲーさ〔いい加減の沖縄方言〕）だけでなく、男ばかりで女がいないこと、4年生が多く卒論フィールド調査で参加できないことも活動にまとまりがみられなかったことの大きな要因のように思われる。男ばかりだと、互いに甘え合ってしまう。厳しく追求しない雰囲気ができてしまう。緻密な活動への自覚が薄く、リーダー的自覚を持つ班員がいなくて、場当たり的活動に流されてしまう。結局撮影すれば終わったも同然のような安心感が動き、活動の大きな空白ができてしまう。そのような状態だから、参加しない4年生にも厳しく要求することが弱くなる。最後の編集活動でやっと盛り上がりがでて、仕上げることができたのである。これに対して、2班「琉球ガラス」では、男5名女5名で、2年から4年までの混合であった。男子班員には、1班のようなテーゲーさもあるが、女子班員が加わることによって、ていねいさが要求され、緻密な活動への要求が無意識のうちに芽ばえ、班長にもリーダーシップが生まれてくることになる。また2・3年が中心だったことも班活動を比較的容易にした要因であろう。

(2)　リーダーと班活動

同一学科班のうち、1班「沖縄の城（ぐすく）」は当初調査で出席できない4年生に班長をおしつけていた。そのため、授業担当者が「これでよいのか」と投げ返したところ、しばらく班長は保留になっていた。第3回目の授業においてようやく班長が決まった。その班長は、取材・撮影にはみずから参加し、またコンテ作成・スライド編集の会議の場所として自宅を提供して、ともかく班活動の中心に位置づく努力はしていた。班長とは、それくらいのことはやるものだという自覚はあるようである。しかし、それ以上のリーダーシップは取っていない。そのため、全体進行状況、見通しがつかめず、スライドづくりをリードするには至っていない。同一学科班でも、2班「琉球ガラス」は結果的に良い作品に仕上がったといえる。その理由は、班長が工房でアルバイトしていたこともあるが、たえずスライド制作のことを気にかけ、見守っていたこと、連絡のまずさから取材・撮影がうまくいかなくても、その失敗を班員のほとんどが気にかけ、班長をカバーする雰囲気（フォロアーシップ）が作られていったことなどがあげられる。混合学科班でも、5班「オリオンビール」は、当初の「ちんすこう」をテーマにしての制作には挫折したものの、班長の全体把握があり、うまく班活動を展開させていった。3班「壺屋焼」では、班長を2名決めたものの、全体リードを意識的に果たしたわけではない。しかし、班での話し合いのなかから、コンテづくりを4つの小グループにわけて取り組むという分業と、さらにそれを全体で検討するという協業とを組み合わせることが提案され、班長のリードを補う動きが生まれ、活動がうまく展開していったとみることができる。

このようにみると、班長のリードと班員のフォローが班共同制作活動において重要になるといえる。

(3)　班員の人数と班活動

班当たりの人数が多すぎて、うまく活動できないという苦情めいた発言も感想のなかにあった。今回の場合、たしかに班当たり10名で構成されていて、多いようにも思える。しかし、多く見えるのは、一面では活動の内容・見通しが見えていないためだとも思える。スライド制作の過程は単純そうに見えるが、実際には細かな活動がたくさんあり、班員を二つに分けたり、三つに分けたりし

て、機能的に動くことも必要になる。制作活動が場当たりになり、何度も撮影にいかなければならなくなったり、それにともなってさまざまな仕事が必要になったときに、いくつかの班は仕事を二つないし三つのグループに分担し、やりきっている。そうだとすれば、人数が多すぎると言うのは、制作活動の見通しが見えていないことを表明しているに外ならない。もっとも、仕事を分担し、それをさらに全体で検討するには、リードする班長（リーダー）が必要になる。班長（リーダー）のリーダーシップと班員のフォロワーシップが問われ、さらには、効率的な班活動を追求するとともにすぐれた作品の完成へのこだわりが問われる。ともすると対立する効率性と質的追求を両立させようとする努力が必要になる。この点での班内における関係づくりと雰囲気の形成が重要になる。

(4) 班活動への学科課外活動の影響

当初、同一学科では学科課外活動の成果が期待できるのではないか、と予想したが、意外にその成果がみえない。学科課外活動が活発かどうかは不明である。活発だとしても、活動の仕方を検討してみる必要が感じられる。場当たり的に爆発的にその場の雰囲気で速効的にやってしまっているのではないかとも思える。ともあれ、受講生は計画を立てて見通しをもって活動することに慣れていないようで、学科での課外活動の肯定的影響というのはさほど感じられなかった。

(5) テーマの模索・決定について

同一学科による班編成では、班での話し合いは円滑に進み、とりわけテーマの決定においてまとまりやすい。とくに専攻学科に関連するテーマを実利的に選択して、時間もかけずに決めてしまう。1回目のテーマ模索で決まってしまった班もある。これに対して、混合学科による班編成では、互いによく知らないために、自己紹介から始まって、雰囲気がよそよそしく、馴染むのに時間がかかる。テーマについても、学科がちがい、興味・関心が異なり、やってみたいテーマを調整するのに時間がかかる。しかし、考えを出し合い、お互いに模索しあっていくうちに、却って馴れ合いにならず、その後の班共同制作活動において時間調整や集合がうまくいくようである。客観的には調整には困難さを伴うのだが、時間調整の雰囲気ができて、うまくいったようである。

(6) 文献調査と取材・撮影

スライドづくりには、二通りのタイプがみられる。一つは、ともかく現場にでかけて取材即撮影するという仕方である。このやり方も一つの方法として認められる。作品の質にこだわらなければ、このやり方でも作品に仕上がるが、撮影した画面の背後、たとえば1班「ぐすく（城）」では城（ぐすく）の歴史性・文化性に思いを傾け、城（ぐすく）の何をどういう角度で作品化するのかを問い直さないと、きわめて平板で表面だけなぞるような作品になる。残念ながら、1班「おきなわの城（ぐすく）」はその傾向が強いといわざるをえない。この点で、取材即撮影の方式で作品づくりに同じく取り組んだ2班「琉球ガラス」には、作品へのこだわりがあり、そのせいで何度も撮影にいくことになるのだが、質的に比較的高い水準の作品に仕上がることができたようである。もう一つのタイプは、じっくりと文献調査をし、コンテ制作に時間をかけて、その後で取材・撮影にはいるという仕方である。従来このやり方を取るように指導してきたのだが、今回、このやり方を取った班は少なかった。それはコンテ提出期限を12月末としなくて、作品終了時に求めたためかもしれない。混合学科班、とくに3班「壺屋焼」の場合、このやり方によって作品のイメージができあがり焼物世界への思い入れが強まって、しだいに共同の雰囲気ができあがっていって、良かったように思える。しかし、コンテにこだわりすぎると、現場での発見と即興性が薄れてドラマ性が弱まる問題点もでてくる。コンテ制作と現場取材・撮影の兼ね合いをどうつけるかが課題となろう。

注

(1) 総合力を必要とする班共同制作活動を取り入れた大学教育実践が最近いくつか報告されている。たとえば、劇づくりについては、徳本達夫「劇の創作による卒業研究」『季刊・大学と教育』第11号、東海高等教育研究所、1994年7月。

ビデオ制作については、鈴木庸裕「多人数講義における授業改革への模索―グループ活動における共同学習を通じて―」『日本教師教育学会年報、第3号、大学改革と教育者養成カリキュラム』日本教育新聞社、1994年6月がある。これらの報告も参考にしながら、大学教育実践としての班共同制作活動について本格的に検討する必要があるだろう。

(2) 藤原幸男「身体・関係・共同の創造と班共同制作活動―スライドづくりにおいて―」『琉球大学教育学部紀要』第45集、1994年10月。